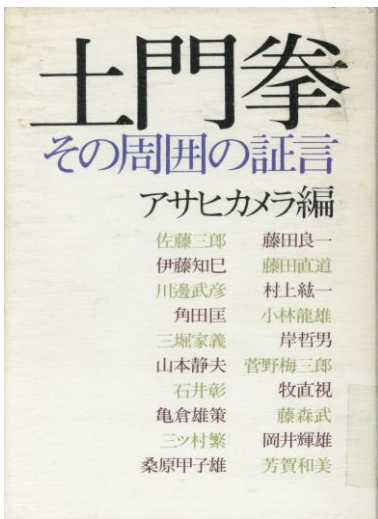


日本カメラ博物館 JCII ライブラリー
学芸員 宮崎真二

伊藤知巳(1927-1986)は、土門拳の甥にあたり1950年には撮影助手をつとめています。早稲田大学文学部を経て1951年にアルスへ入社し、写真雑誌『CAMERA』の編集に携わり、1955年には数か月間編集長をつとめました。しかし、同社が混乱するなかで同年末に退社し、1957年からフリーの写真評論家として活動を開始します。以降1960年代半ばにかけて、写真雑誌各誌にて展評、作品批評を中心に精力的な執筆活動を行いました。一例として『アサヒカメラ』では、1961年5月号から1965年12月号まで「現代の感情・新進写真家紹介」(のちに「新人」)欄で作品作家批評を行っています。

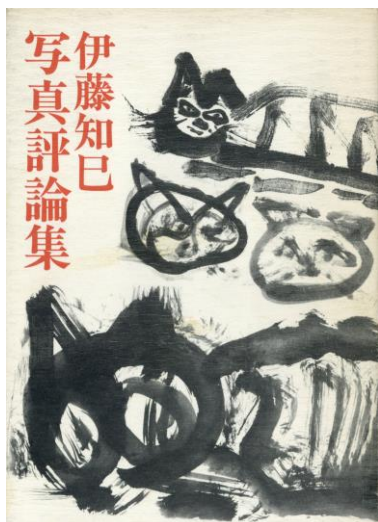


『土門拳 その周囲の証言』

伊藤は、一貫して土門が提唱したリアリズム写真運動を支持する方針をとりました。日本写真批評家協会、日本ジャーナリスト会議写真支部の設立に関与し、1965年からは日本リアリズム写真集団の活動に携わり、理論部長、事務局長、幹事を歴任しました。

さらに、書くことだけが評論活動の全てではないとして、1974年には同集団附属「現代写真研究所」の設立に参画し、教務主任として、写真家の考え方や写し方などの分析、撮影地などの実見を行うことで、制作行程を見て自らが感じたものと写真家の撮ったものを組み合わせて集団内で検討するような新しい写真批評活動を試みています。

1978年から翌年まで『アサヒカメラ』で連載され、1980年に朝日新聞社から書籍化された『土門拳 その周囲の証言』で、伊藤は土門の旧制中学時代と50年ぶりの母校訪問の様子および、身内ゆえに知る細かいエピソードを披露しています。また『土門拳全集』全13巻(小学館・1983年～)の編集委員を担当したほか、土門拳記念館建設期成同盟会の評議員をつとめるなど、最期まで土門の仕事に対する検証と評価を行いました。



『伊藤知巳写真評論集』

東京総合写真専門学校、東京造形大学、桑沢デザイン研究所などでも教務活動に携わりましたが、単独著書は上梓していませんでした。没後の1988年には、さまざまな媒体に記した批評などの集成として『伊藤知巳写真評論集』(現代写真研究所)が刊行されました。本書発行を受け、同じころに写真評論活動を開始して深い交友があった重森弘淹は、『日本カメラ』1988年7月号の連載で伊藤との思い出について触れ、同時期に写真評論活動を行っていた福島辰夫とともに「たがいに、自分のスタンド・ポイントを護った」と回想しています。